

2026年10月25日（日）第576回・ボイスキュー「グラウンドワーク三島・アクショントーク」

清流・三島からネパールへ広がる環境美化の連鎖

第17回 訪日交流

グラウンドワーク三島 × ネパール日本友好協会

議論よりアクション：清流三島からネパールへ広がる環境美化の連鎖

第576回ラジオ放送対談 総括 ― 実践型保全活動を通じた意識変革と帰国後のアクション宣言

22年の草の根交流と「現場主義」の環境教育

10月25日（日）対談収録

24年前に和太鼓演奏をきっかけに始まった交流は、次世代育成を目的とした草の根交流へと発展し**通算22年間継続**。河川汚染の課題を抱えるネパールの学生へ、かつて汚濁河川を清流へと蘇らせた三島市の再生モデルを伝達しています。

三島モデルの伝承

座学ではなく冷たい清流でのバイカモ移植や泥臭い清掃を通じて、自然再生の現場を体得。

議論よりアクション

「手を動かせばその場で綺麗になる」即時的な成果体験が、内発的な動機付けを形成。

教育的インパクト

100倍

教室講義を超える知識と経験の定着効果

引率教員総括：現場での作業プロセスを直接体感することが、学生の心に最も深く環境意識を刻み込む。

体験がもたらした「意識の変革プロセス」

富士山駐車場や三島市内での実作業を通じて、学生たちのマインドセットが劇的に転換しました。

初期段階 「なぜ私たちが拾うのか」という疑問

環境美化作業に対する受動的な姿勢と作業への不満

↓

転換後 自発的な継続と「市民としての義務」の自覚

水や酸素の恵みを受ける人間側の責任として環境保全を捉え直す

指導者の視点・共鳴の言葉

素直な吸収力と実践が社会を変える力についての対談インサイト。

渡辺豊博 専務理事
「乾燥した砂漠に水がスーッと浸透するかのよう」
高い感受性で学びを吸収し、即座に行動に移すネパールの学生たちの姿勢を高く評価。

活動の核心
頭で議論を重ねるだけでなく、身近な通学路や学校周辺から始める小さなアクションこそが、社会全体を変革する確かな原動力となる。

帰国後の実践マニフェスト（Action Items）

現地での定着・展開フェーズへ

渡 @渡辺豊博（ジャンボ）
帰国後の清掃活動を後押しするため、交流団の学生たちへ「ほうき」を贈呈する
🛠 実践ツール支援

S @Sadiq Chasha
ネパール帰国後、自身の身の回りのゴミ拾いおよびゴミ管理（美化活動）を徹底実践する
🏠 身辺美化の実践

G @Gimilsarina
学校の清掃活動を率先して牽引し、その重要性和美化の意義を仲間へ普及・伝承する
🏫 校内リーダーシップ

S @Sakuradal Fayan
三島で学んだ自然保護の価値を踏まえ、帰国後に自然を守るための具体的保全活動を展開する
🌿 自然環境の保護

T @Tulas Fajapati
清潔さ・規律・市民意識を行動変革し、その変化を家族・地域社会・世界へ波及させる
👥 市民意識の波及

全 @学生交流団全員
学校周辺や通学路でのゴミ拾い・清掃活動を習慣化し、地域社会を牽引するリーダーとなる
🗑 日常的清掃の習慣化

NPO 法人グラウンドワーク三島が、受け入れた第17次・ネパール日本友好協会のネパール訪日団が、ボイスキューに出演し、三島市での清掃やバイカモ移植といった体験型環境活動の成果と感想を報告するとともに、帰国後に各自が実践する環境美化への具体的な決意を語った。

番組オープニングとネパール学生交流団の受入背景

10月25日（日）放送の第576回「グラウンドワーク三島・アクショントーク」では、来日中の「第17次ネパール日本友好協会・ネパール訪日団」をボイスキューのスタジオに迎えました。

スタジオには、ネパール訪日団の引率教員および通訳を含む男女4名、山梨県からの引率者・石岡氏、グラウンドワーク三島の渡辺氏らを含め、総勢10名が集い賑やかな対談が行われました。

ネパールとの交流は、グラウンドワーク三島の理事を務める石岡氏が、24年前に和太鼓演奏を通じて現地と交流を持ったことが契機となっています。

かつての一方的な文化交流から、次世代を担う子ども・学生同士の草の根交流へと舵を切り、通算22年間にわたり、継続されてきました（コロナ禍による5年間の休止を経て2年前に再開）。

渡辺専務理事が現地を訪問した縁から、三島市での受け入れが定着し、深刻な水質汚染や河川の課題を抱えるネパールの学生たちに対して、かつて汚濁していた河川を清流へと再生させた、三島市の先進的な環境保全の取り組みを学ぶ貴重な機会を提供しています。

三島での体験型環境保全活動と意識の変化

グラウンドワーク三島が提供するプログラムは、一般的な観光や座学にとどまらず、ゴミ拾いや草刈り、公園通路の清掃、清流水生植物であるバイカモの移植といった泥臭い実践作業（アクション）を主体としています。

活動の根幹には「議論よりアクション（行動）」という方針があり、現場で、実際に手を動かすことの重要性を伝えています。

過去に富士山の駐車場で実施した清掃活動では、当初「なぜ私たちがゴミを拾うのか」と不満を漏らしていた学生たちが、自ら作業を行ったことで、汚れた現場が目に見えて美しくなる達成感を味わったことにより、暗くなるまで「もっと拾いたい」と自発的に清掃を続ける「意識の変化」が見られました。

今回、参加した学生たちも、冷たい川に入っただけのバイカモ移植や公園清掃作業を通じて、自然の恵み（水や酸素）を受け取る人間側の責任として環境を守る意義を実感し、環境保全は単なる雑用ではなく、市民としての「義務」であるという高い意識を持つに至りました。

引率指導者による教育的成果の総括

引率教員からは、グラウンドワーク三島の実践的な環境保全活動に対して深い謝意が示されました。

教室内での講義や教科書を通じた学習に比べて、現場での泥臭い作業や環境改善のプロセスを直接体験することは「100倍以上の知識と経験の定着」につながると高く評価されました。

渡辺専務理事も、ネパールの学生たちの感受性の高さを「乾燥した砂漠に水がスーッと浸透するかのように」と表現し、素直にアドバイスを吸収して、具体的な行動に移す姿勢を称賛しました。

清掃活動は「作業すればその場で綺麗になる」という明確な答えが即座に出るため、参加者の心を清々しくさせ、自然と真剣な取り組みへと導く、高い教育的な効果を持っています。

頭で議論を重ねるだけではなく、身近な通学路や学校周辺から始める小さなアクションこそが、社会全体を変える原動力になると総括されました。

帰国後の具体的な環境改善に向けた学生たちの決意表明

訪日団の学生たちは、今回の滞在で得た学びを胸に、ネパール帰国後に実践する具体的なアクションプランを発表しました。

石岡氏からは、現地校で既に昨年からゴミの分別や清掃活動が定着し始めていることが紹介され、渡辺専務理事からは、実践活動を後押しするお土産として「ほうき」が贈呈されることが約束されました。

小さな一歩が波紋のように広がり、家族、地域社会、ひいては、世界をより良く変えていくという信念のもと、力強い決意が共有されました。